辞書学の進歩と新時代の和英辞典

南出康世

和英辞典の特殊性：英和辞典とMLD

「和英辞典は英和辞典より遅れている」というのが定説になっている。何故だろうか。日本の英語教育が受信型であったというのが主な理由にあげられることが多いが，それ以外にも理由がある。

かつては，一言語学習辞典（monolingual learner's dictionary: MLD）は英語のネイティブスピーカーを対象にしたPOD，CODなど一言語一般辞書の脇役的存在にすぎなかった［辞書学の分野ではMLDはしばしば英英学習辞典を指して使われるので本稿でもそれに従う］。しかし1980年代に入ってコンピュータ・コーパスを全面的に利用した COBUILD が登場すると，OALD，LDOCEなど既存の学習辞典，あるいは，新刊の学習辞典（CIDE（現在ではCALD），MED(AL)など）がこれにならい，「コンピュータ化」と「圧縮された情報より検索の容易さ」の波に乗れなかったPOD，CODは英語学習者のみならず一般のユーザーにも敬遠されがちになった（POD，CODは今でも版を重ねているが，記述形式は米国のカレッジ版辞書に似てきた）。米国では英国に比べMLDの取り組みは遅れていたが，2008年には *Merriam-Webster's Advanced Learner's Dictionary* が出版され，2009年には北米辞書学会（Dictionary Society of North America）で "English Learners' Dictionaries" というシンポジウムが初めて開かれるなど，米国でもMLDに対する関心は高まりつつある。

英和辞典とこれら辞書学の先端を行くMLDとの対比は比較的容易である。見出しとなる言語はともに目標言語（target language）である英語であり，発信のために不可欠なC Uの表示，文型表示も類似しており，あとは語義が英語・日本語のいずれで書かれているか，用例に日本語訳がついているかどうかの相違である。英和辞典はMLDの長所を取り入れ，また独自の工夫を凝らして発達してきた。現在の学習英和辞典は競合するMLDに勝るとも劣らないと言ってよいだろう。このように英和辞典は世界的な文脈の中で評価することが可能である。

しかし基底言語（source language）である日本語が見出しになっている日本人のための和英辞典は，外国の二言語学習辞典（bilingual learner's dictionary: BLD）と直接比較・対照するのは難しい。英和辞典の場合MLDの進歩を直接・間接的に反映できる（またMLDの側にも英和辞典の長所を反映する試みがなされつつある）。しかし，和英辞典の場合，このような相互作用を外国のBLDに求めるのは難しい。このように考えると「和英辞典の遅れ」の一因は国際性の欠如にあるといってよいかもしれない。

とはいうものの，和英辞典はもちろん確実に進歩している。その発達の歴史をざっと見てみよう。

和英辞典の成立と発展

日本で最初の和英辞典はヘボン（J. C. Hepburn）編『和英語林集成』（英語名 *A Japanese and English Dictionary with an English and*

Japanese Index が示すように和英と英和の合本であった）（1867）である。本書は序文で述べているようにメドハーストの『英和和英英語語彙』や江戸時代の節用集を利用しているが，“His principal dependence, however, has been upon the living teacher...”とあるように，基本的には「生きた（日本語）教師」（living teacher）即ち，彼が接触したさまざまな階層の日本人，彼の下僕，出入りの職人・商人，彼の患者等から吸収した日本語である。「生きた教師」をコーパスにしていることから，当時の日本人の日常生活語彙を俗語・擬声語（e.g. Jara-jara）・方言（e.g. uwanari）なども含めて精力的に収録している。この点で本辞典の初版は江戸幕末，2版（1872）は明治維新，3版（1886）は明治維新以降の変化のきわまりない日本語の実態を伝える貴重な資料となっている。本書の特徴をいくつか列挙してみよう。

(1) 実際には日本人も使用したが，本来対象とするユーザーは日本にいる外国人，特に宣教師である。後世の和英辞典がほとんど全て，日本人が編集し，英語を学習する日本人のみを主たる対象にしているのと比べると特異である。

(2) これまでヘボン辞書研究であまり指摘されてこなかったことであるが，不定冠詞の有無によって，下記の如く，

Nimotsz，ニモツ，荷物，*n*. Baggage, luggage, goods in packages.

Kagi，カギ，鍵，*n*. A key.

baggage，luggage が不加算名詞，key が加算名詞であることが読みとれるように工夫されている。非明示的にせよ，日本最初の和英辞典で$\boxed{\text{C}}$ $\boxed{\text{U}}$の相違が示されたのは画期的なことである（ちなみに，$\boxed{\text{C}}$ $\boxed{\text{U}}$を明示したホーンビーの *Idiomatic and Syntactic English Dictionary* が出たのは1942年である）。

(3) いいかえ表現：多くの見出し語項目には

Hanjuku，ハンジュク，半熟，（nama niye.）Half cooked.

のように漢字のあとにローマ字でその意味が説明されている。最近の和英辞典に見られる「対岸の火事ですまされるものではない（→無関心ではいられない）」のような工夫とよく似ている。対象とするユーザーが異なるので，その目的も異なるが，日本最初の和英辞典でこのような工夫がすでになされていたのは興味深い。

『和英語林集成』はヘボンが日本を去ってからも版を重ねたが，実質第3版とほぼ同じである。後の和英辞典に与えた影響は極めて大きかった。ヘボン離れが起こるのはブリンクリー（F. Brinkley）他編『和英大辞典』（1896）あたりだといわれている。ブリンクリー以降さまざまな和英辞書が発行された。一般的傾向として，(1)ユーザーとして日本人を対象，(2)日本人レクシコグラファー中心の編集，(3)和英と英和は独立して編集出版，などを指摘できる。現代の和英辞典の原型を作ったとされる竹原常太著『スタンダード和英大辞典』（1924），斎藤秀三郎編『斎藤和英大辞典』（1928），武信由太郎編集主幹『新和英大辞典』（1931）のそれぞれの特徴を見てみる。

(1)「日本英語」（Japanese English）から脱するため英語の書き言葉30余万例をマニュアルコーパスとして用いた（竹原）。具体的には30余万例の英文を日本語に訳し，その訳文の中の訳語を見出し語に立てもとの英文を用例としてあげた。英語先行の和英なので当然日本人に必要な情報に欠けることが少なくない（たとえば，「ニュース」と言った見出しがないし，**kaisha**[**会社**]の見出しがあっても「会社に行く」という英文用例がないなど）。

(2) ネイティブスピーカーによる用例のチェックを行った（武信）。*A Basic Guide to English Composition*（1928）の共著者であるG. B. Sansom が全用例のチェックを行った。

(3) 慣用連語（phraseology）重視の編集を行った（斎藤）。斎藤自身の用語を使えば，

idiomology 本位の辞書ということになろうか。

(4) 見出し語に相当する英語の同義語を単に羅列するだけでなく，部分的にではあるが使い分けを示した（武信，斎藤）。例を示そう。

ZU［図］［絵図］A drawing: a picture: ［設計図］a plan: ［挿画］a figure: a cut . . .（武信）

よろずや［**万屋**］（商人なら）a general dealer, a universal provider:（店なら）a general store, a jumble-shop:（人なら）a Jack of all trades:（学者なら）a pantologist.（斎藤）

さらに慣用連語重視の斎藤は効果的と思われる個所は使い分けをコロケーションで示している：

溺れる［**溺惑する**］to addict oneself to (dissipation) : to abandon oneself to (pleasure) : to give oneself up to (enjoyment) : to indulge in (wine) : to dote on (children) : to be infatuated with (a woman) : to be absorbed in (the ideal) といった具合である。斎藤の和英辞典といえば，「吉原が明るくなれば家は闇」のような用例ばかりが強調されるが，それはごく一部で，全体的には実にまじめで有益で，時代を先取りした学習和英辞典である。

『ジーニアス和英辞典』第 3 版の意義

最近の和英辞典はこれら過去の辞典の優れた点を統合した形で取り入れつつ，C U表示，文型表示，コミュニケーション機能の解説などを加え，さらに基底言語である日本語の見出し語選定，語義分類に日本語学者の意見を取り入れるなど，英語と日本語の両面から内容の充実に取り組んできている。『ジーニアス和英辞典』第 3 版はこのような流れを視野に入れつつ，受信型から発信型へと大きく変化しつつある社会ニーズに対応するため，次のような大胆な試みを行った。

「和英は英和より遅れている」という汚名を返上する最大ポイントは用例の充実にある。理屈の上では用例は数が多ければ多いほどよいが，スペースの制限がある。限られたスペースを有効に使う手段として，まず頻度の高いコロケーション，典型的な日本語コロケーションを選定する必要がある。この際日本語を母語とする日本人編集者・執筆者の直観がものを言う。しかしネイティブスピーカーの直観については，“Users of a language are not necessarily accurate reporters of usage, even their own” / “There are many facts about language that cannot be discovered by just thinking about it, or even reading and listening very intently”（Sinclair）といったコーパス言語学者の厳しい見方もある。日本語コーパスやグーグルで得られる客観的根拠と直観を相補的に用いる必要がある。

このようにして得られた用例を英語に直すわけであるが，それが「日本英語」「文法的であるがネイティブスピーカーにとって不自然な英語」であっては「和英辞典は役に立たない」という根強い不評を一掃できない。そこで今回の改訂にあたっては約40人のネイティブスピーカーを動員した。これは和英辞典史上初の試みであろう。しかも単なる英文校閲でなく日本人執筆者と共にゼロから英文を作成する手段を取った。「ネイティブスピーカーの数が多ければよいというわけでない」という批判が聞こえてきそうである。確かに校閲の段階で疑問に思える例は少なからずあった。そこで少しでも疑わしい用例は言語学に造詣が深いネイティブスピーカーに再度チェックしてもらうなど万全を尽くした。

そして特殊な文体が必要とされる場合を除いては，用例はフォーマルに過ぎずインフォーマルに過ぎないニュートラルな文体，できるだけ多くの場合に違和感なく使える無色の文体に統一した。また日本人が間違いやすいと思われるところに非文情報を入れた（e.g. 私たちの会社の前に銀行がある There’s a bank across from our office [×company].）。

（みなみで　こうせい・大阪女子大学名誉教授）